つねに考えながら…

理工学部長
風間（かざま） 重雄（しげお）

学生時代から数えると人生のほとんどをこの理工学部で過ごされた一人の先生がこのたび定年ご退職されるのを記念して、研究室のOBと学科の共催による歓送会が開かれました。多くの卒業生が各地からかけつけ、またすでにご退職されていたかつての同僚の先生方も参集されたよい記念の会でした。その席上、かつて同僚だったある先生がスピーチのなかで次のようにいわれました。「おまえたちは、学生時代、授業中に居眠りはするは、私語はするは、他人のレポートをうつして平気な顔をして出したりして、なんだ、あのざまは！」と。しかし、青春時代にはこのようなことがあってもよいのかも知れません。皆さんの多くの先輩たちが社会の中堅として活躍しておられるのを見ると、これから皆さんが担うことになる次の時代には『希望』があると、私は信じることができます。

いまは、「先行き不安の時代」とか、「見通しの悪い時代」とか、あるいはまた、「五年先のことなどまったくわからない時代」などといわれています。しかし、「見通しがよい（といわれた）時代」や「五年先のことがわかっている（と人々が勘違いしていた）時代」の方がはるかに悪い時代であったというのが、私たちが人類の歴史から学ぶことです。

人間にとって『死に至る病』とは、絶望のことです。私は、皆さんの存在そのものが『希望』である以上、この社会が死に至ることは決してないと信じています。これからの人生において、悩みながらも考え、絶え間なく打ち寄せる苦しみを越えて喜びに至る道をつねに探しもとめて、歩んで下さい。『考える』ための素地はすでに作られています。そのことに自信をもって巣立っていって下さい。